外部発表

森のめぐみ

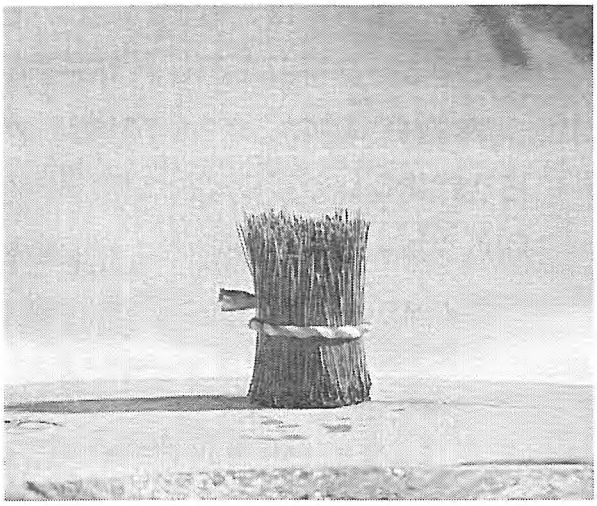
岩手県国有林造林生産請負事業協議会
専務理事　山田　徹治

1、はじめに、

一枚の葉ですら、人間は作りようがない。
それを思うと枝も葉も捨てられない。森の恩恵を無駄にすることなく、心豊かに暮らす岩手の人々について、二、三の例を紹介したい。

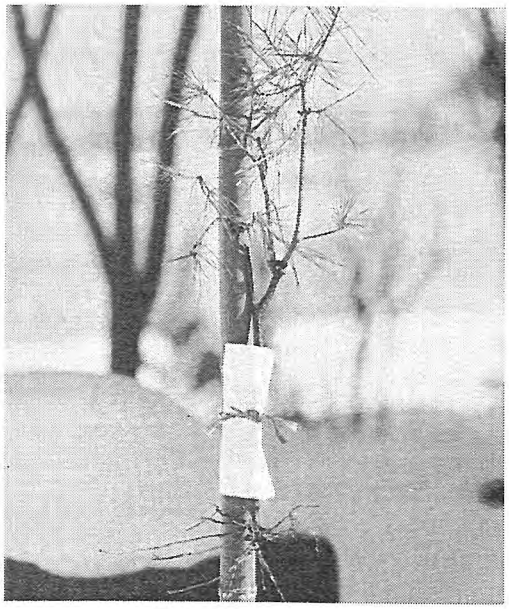
2、　森は、木の葉と、小枝をくれた、という人達。

（1）　過不足のない色と形ちの木の葉を楽しく、美しく活かす遊びがある。
木の葉遊び１２ケ月は、月ごとに使う木の葉が決まっている訳ではない。
例えば、１月は「立て松葉」である。
松の葉を紅白の和紙で結び、松葉のように、未来を真っすぐに見据えて生きていきたい、という思いを表すのである。
２月は、アオキで節分の鬼祓いをするのである。
鬼は干し鰯の臭いがきらいだということで、干し鰯を二、三匹添えるといった具合である。
「季節を愛でる、季節を飾る」のが、木の葉遊びである。



「立て松葉」

（2）　正月飾りは古来より常緑樹が用いられてきた。
日本の神々は自然を司る神々だから、自然の材料で作るのがよいようだ。
「根引き門松」もその一つである。
厳冬にも葉の色を変えない松は、人に生気を与える、として尊ばれるのだという。
「根引き門松」は、松の木に和紙を巻いて、紅白のひもで結んだ迎神の飾りである。根をつけたまま飾るのであるが、これは、「わが家に福が根をおろすように」という願いが込められているのである。
松の木は、天然に生えた林から秋に山引きしておくのだそうだ。



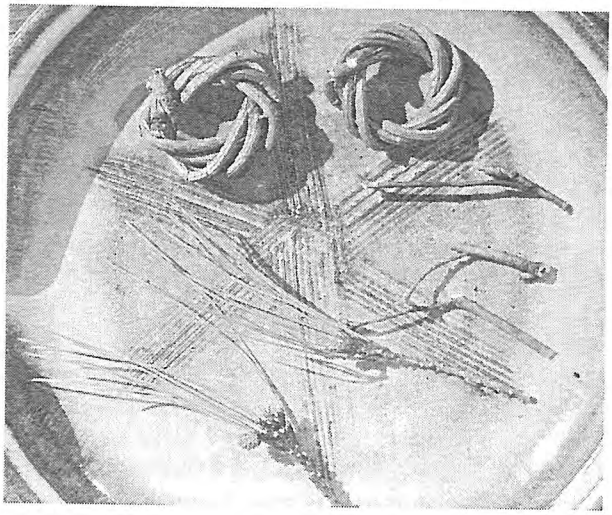
「根引き門松」

（3） 便利で丈夫なたくさんの人工物がこの世に溢れているが、落葉や小枝などを日常生活に活かしている人がいる。

全部を紹介できないが例えば、食べ物を「包んだり」、「皿にしたり」、「敷物にしたり」、つるや小枝で「箸」や「箸置き」を作ったりしている。

また、食卓にカラマツの落枝や、つる物を添えたり、季節のものを無理なく日常生活に取り入れているのである。

みんな口を揃えて、自然の素材に優るものはないといい、森は、木の葉と小枝を私達にくれた、といっているのである。



3、 森は、風景と水をくれた、という人達。

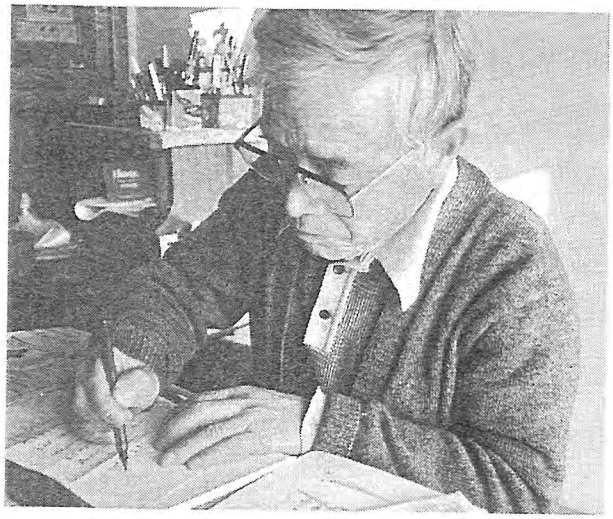
（1） 一関市に品質日本一の曲りネギを作っている高橋さんという人がいる。高橋さんは、栗駒山と磐井川をみつめながら鍬を握ってきたという。

栗駒山と磐井川は、ふる里の「風景」と、きれいな「水」を私にくれた。私の心に大変広く深い「めぐみ」をもたらしてくれた。まあ、森は親父のようなものですよ、といっていた。

色紙をいただいてきたが、「山ひだから出る水が集まって川となり、広々とした大地を沃やす。水はきれいだ。ここで一生鍬を握りたい。」と書かれている。

航空会社勤めをしていた高橋さんは、実家の事情があって郷里に帰って、５０代から始めた百姓だと述懐していた。

高橋さんの百姓の原点は、ふる里の山と川にあると愛着をこめて話してくれた。森のめぐみに感謝する高橋さんの日々が感じられた。



花巻市に日本三大清水寺の一つがある。清水寺の近くの「水の木」地区に「水分神社」がある。神社の周りから湧き水が流れている。近くに住む人達は、上流の山なみからしみ込む水が湧き出ているのだから、水分けの水は、森からの貰い水だといっていた。

この地区には森への感謝を忘れない人々が多いことを感じた。

森は風景と水をくださった、ということである。

岩手県を代表する「岩手山」、盛岡市内を流れる「中津川」。この山と、そして川が県都盛岡市民に限らず、多くの人々に限りない、心の豊かさをあたえてくれている。

「美しき風は、美しき林にふく。清き水は清らかな森に流れる。暖かい言葉はそこにこだまする。いいところとは、いい人の集う山」という詩がある。

森のめぐみをしっかりととらえ、温かく表現した詩であると思う。

森は人々の内なる心に限りない豊かさをもたらしてくれているのである。

4、　森は汗を流すグランドをくれた、という人達。

宮古営林署管内の山田町豊間根の農家の主婦１８名は、今年度平均１４０日ほど造林の請負事業へ出て働いた。

昨年、岩手大学の岡田教授がこのグループを励ますため同地へ出向いて、「キラリと光る女性達」という講演をされた。

そのあと懇談の時間があって私も同席させていただいた。

女性達は、「山仕事は大変な労働だ」という。「特に炎天下の下刈作業は、汗が全身を滝のように流れる。そんな時も、山仕事がいやだと思うことは決してない。」という。

また、豊間根には町へ出て働く人も多いが、私達は山の仕事をさせてもらっている、「町へ出て働くことができない人が、山へ来ているのではないか、という見方は決してしないで欲しい。」ともいっていた。

自然の中で、汗を流して精一杯働く喜びを話してくれた。

森は気持ち良い汗を流すグランドをくださった。
ということである。

岡田教授は、共有林の問題とかで豊間根へ幾度か足を運んでおられ、この地域の事情をよく知っておられるのであるが、岡田教授の話された、キラリと光る女性達との出会いは、森のめぐみと同様、壮快そのものであった。

5、　森は、内なる心に豊さをくれる。

豊かさとは何か、より多く持つこと、一つ持つことよりも二つ、二つ持つことよりも三つ持つことであるかのような考えもある。

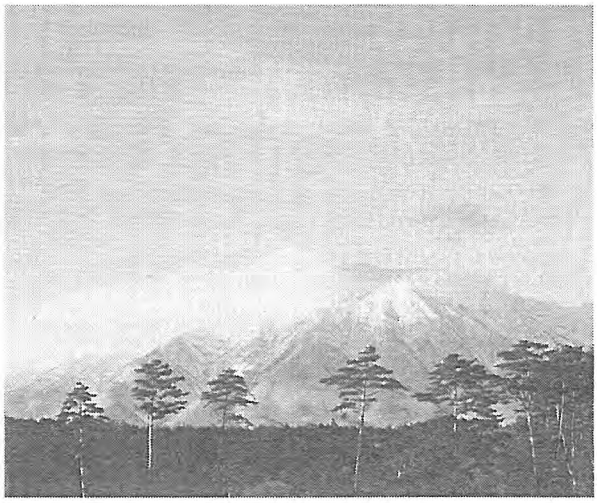
しかし、何人かの人にお会いして、「内なる心」に贈ってくれる「森のめぐみ」に豊さを実感して暮らす人々がいることを知ることができた。

物質中心でない精神的、感覚的欲求が強くなってきている傾向がうかがわれ、美しく感性豊かで遊び心があって創造性のある一人ひとりの価値観の選択が進んでいるのではなかろうか。

一方では、「山へゆこう」といったら「何をするに行くんだ」という人もいる。

森のめぐみを知らない人、知ろうとしない人も多いのも事実である。

そのような人に私は、「何をするかを考えるのに一番いいところだ。」と話してやることにしている。



森の恩恵を無駄にすることなく、心豊かに暮らす多くの人々にお会いしたが、国有林に対する批判めいた言葉はなかった。むしろ、国有林に対する期待と信頼に手堅い感触を覚えた。

科学が進み、ハイテク時代になればなるほど、自然指向の生活感が求められることになるが、森の重要性は更に高まり、そして、その「めぐみ」に対する価値観も更に高まることであろう。

一関市の品質日本一のネギ作りの高橋さんの話しにもどるが、５０才を過ぎてからの百姓だったから、一生懸命勉強したそうだ。今、７つの博士号を持っているといっていたが、例えば、土壌について納得がいくまでになったら、自分で自分に土壌学の博士号をくれたのだそうだ。そのような積み重ねで７つの博士号を持ったのである。

森は親父のようなものだという高橋さんは、帰りぎわ私に対して、「山田さんは、電話で国有林の仕事を長くやられたと聞いたが、山仕事の博士号をいくつ持つことができましたか、」と尋ねられ、ギクリとした。

私は退職するまでに自分で自分に博士号をくれることができなかった。

「森のめぐみ」に応えるため今から博士号が、果して取れるだろうかと、考え込むこの頃である。